

森を守る会に参加して



第一生命経済研究所 取締役

松下 公勇

西は高尾山麓から東は多摩川付近まで、南は三浦半島までの丘陵地帯を総称して、多摩・三浦丘陵と呼んでいる。上空からみた形がイルカに似ていることから、いるか丘陵と呼ぶこともある。無数の切れ込んだ谷と丘陵が複雑に入り組み、里山を形成している。昭和30年代までは、谷筋は水田として、丘陵上部は畑に、斜面は落ち葉や枯れ枝を拾い、肥料・燃料にした里山の生活が容易に想像される。今では、谷筋も丘陵も宅地開発され、その面影をみることはまれになった。それでも里山地形であるがゆえ、一般的に、開発するに制約があり、それがかえって市街化された町の思わぬところに広くはないが、豊かな自然が残っている場合がある。

拙宅は、このイルカの形をした丘陵の丁度頭にあたる所にある。街は高齢化が進み、お年寄りの一人暮らしが多く、静かな街である。それほど遠くないところに、先ほどの話ではないが、7haほどの雑木林が広がっている。コナラやクヌギなどの落葉樹やサワフタギ、ハナイカダなどの低木が生え、春はカントウタンポポ、ムラサキケマン、夏はノアザミ、カワラナデシコ、秋は彼岸花と豊かな植生が確認され、季節には鶯、ヤマガラ、ヒヨドリなどの野鳥のさえずりも聞こえ、心を和ませてくれる。

およそ5年前に、この森を守る会が発足した。現在会員数は60数名で原則月2回の活動を行っている。私もこの豊かな森に少なからず癒されている関係から、何か自分に来ることはないか考え、つい数カ月前にこの会に入会した。里山は下草刈りや枝打ち、定期的な伐採など、人の手が入ることによって維持されていることを知った。会員には地元の高齢の方が多く、活動の合間に色々と土地の話を聞くのも楽しみの一つである。

会そのものは、この森の一部がかつて大規模開発されそうになった折、その反対運

動からスタートした。その後地域住民自らの手で、普段から開発されにくい環境を作るため、行政をも巻き込んで、森を守る会に発展してきた。また最近では、単に里山環境の保全・育成だけではなく、地域コミュニティの再生もそのテーマとして取り組んでおり、この点も参加したきっかけだった。

ところで、日本全体で一人暮らしのお年寄りは400万人を超え、新聞紙上では時々「孤独死」が取り上げられる。人知れず亡くなることからくる、今生きている者の立場での「かわいそうに」とか「さぞや寂しかったろうに」という思いを抱く場合が多い。日々の生活はもっぱら公的年金に依存し、時には子の為に経済的援助をする姿を想像するとなおさらである。でも考えてみると人は必ず死を迎える。事象としての「孤独死」そのものが問題ではなく「孤独生」が問題であろう。

一方、子どもをめぐる生活環境への不安感では、安心して遊ぶ場所が少ないとかで、安全面への不安が高く、地域コミュニティの再構築が求められている。更には周りの人との人間関係づくりにおいて学校教育に期待が寄せられているが、子どもを教えることは、何も学校教育だけで事足りるとは思えない。先ほどの森を守る会では、定期的に地域の子どもたちを招待し、自然に親しむ機会を提供している。そこでは、親子ともども参加し、ボランティアのリードのもと、里山の生活の一部を体験する機会がある。一時的であるが、三世代コミュニケーションが形成され、かつて存在したが今ではなくなりつつある世代間の交流が行われる。教える側、教わる側ともども、生き生きとした姿を垣間見ることが出来る。

このような従来家庭が持っていた世代間の情緒的關係や相互扶助の仕組み、町・村が持っていた地域コミュニティというセーフティーネットが崩壊しつつある今、この解決のため色々な試みがなされているも、我々はいまだその代わりになる確たるものを見出していない。一人で生活することに不安を感じるお年寄りにどのように寄り添ったらいいのか。健全な子どもの育ちのためには屋外での運動や活動が重要と分かっているも、身近な児童公園ですら、安全面に不安を感じる昨今、いったいどうすればいいのか。色々の価値観、人生観があるなかで、個人のプライバシーとかの兼ね合いなど、解決すべき課題も多い。

行政、NPO等のボランティア、地域住民、医療関係者等との連携など、お年寄りや子どもたち、地域住民が安心して生活できる環境をどう整えたらいいのか。この宿題を考えながら、自分の身の丈にあった活動を無理なく今後も続けていこうと思っている。